

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。
広報の吉澤 明さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。



お化け

「お化け」のお話を
しましょう

「お化け」は妖怪や幽霊の総称のようですが、皆さんはその手の話はお好きですか？ 子どものころ林間学校やキャンプで語り合った思い出がある方は多いのではないのでしょうか。いつの時代もお化けの話は人の心を刺激してくれますよね。

江戸時代の怪談の会…
「百物語」

江戸時代に子どもたちの間では「百物語」という怪談話を楽しむ会があったそうで、「新板子供遊びの内 百物がたりのまなび」という作品にその様子が残されています。

「百物語」とは、冬の晩に子どもたちが一軒の家に集まって、行灯に百本（実際は数本）の灯心（明かりを灯す糸の束）を灯

して、怪談をひとつづつ語ることにひとつづつ灯を消していく遊びのこと。

百話目の話が終わり、全ての灯が消えると暗闇の中にお化けが現れるという興味深い趣向で楽しんでいたようです。

怪談話を語る中での
学び

「百物語」は年齢の違う子どもたちが集まり、友だちや親きょうだいで聞いた怪談話を語り合います。「ドロドロ」とか「ヒュー」という擬音を入れたり、道具を使ったり、身振り手振りで工夫を凝らしていたかもしれませんね。暗い部屋で怪談話を聞くのは怖いけれど、いろいろな話を人から聞いたり、自分の話を人前で披露しながら、少しずつ上手に話れるようになっていったことでしょう。

この浮世絵の題名に「百物がたりのまなび」とありますが、子どもたちにとっては「百物語」は江戸時代版の遊びにおけるアクティブラーニングだったのかもかもしれませんね。

新板子供遊びの内 百物がたりのまなび

歌川芳虎
天保頃（1830-1844）

畳の上には菓子袋、菓子をのせた盆、茶飲み道具などが無造作に置かれ、火鉢を囲んで正面の子どもが身振り手振りを入れながら怪談話を語っています。周りの子どもたちは興味津々で聞き入っています。おやおや左奥の方で3人の男の子が話に参加しないで長火鉢を囲んでのんびりとお茶を飲んでいますね。こっちで話を聞けと言わんばかりに1人の男の子が屏風の陰からお化けの「かかし」でおどかしたので、3人はビックリして逃げ回っています。

「百物語」を長火鉢を囲んで楽しんでいる様子から冬の夜の楽しみだったことがわかります。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note



江戸ミニ知識

現代の怪談話はなぜ夏のもの？

お化け小屋（屋敷）や歌舞伎が四季の中で最も客足が遠のいたのが、暑い夏だったそうです。夏といえば先祖の魂を供養するお盆の時期でもあり、この時期に浮かばれない霊の鎮魂の意を込めて怪談話の演目を行い、呼び出したことが夏の怪談の始まりのようです。